

# 随想



## ウルム市立劇場

百崎素明

ミュンヘンから西へ百キロばかり離れたところに人口十万ほどのウルムという町がある。

この市立劇場は小規模ながら最近のヨーロッパにおける最もすぐれた劇場の一つにあげられている。私は幸運にもこの劇場の設計者であるシェファー教授から懇切に案内してもらった機会を得た。

まず驚いたのは日本の同一規模の市民会館などと比べて建物の建設費や維持運営費が十倍以上にも達していることだった。ちなみにウルム市立劇場の収容力は八百席であり、これに要した建設費は二

十五億円である。舞台まわり、照明、音響など設備全般にわたって近代技術の粋を尽くし、劇場のすみずみにいたるまで高度に洗練された美が支配していた。できるだけ少ない費用でなるべく見映えのする大きな施設をつくりがちな日本の傾向とはまるで考えの土台が違う。建物の外観と客席のみでなく、出演者と管理者のためにも周到な配慮がなされている。このようにすぐれた設備は、この劇場が芸術とよぶに値する音楽や演劇などの創造と鑑賞に限って用いられるということをはっきり示している。従って建物のつくり、運営ともに、集会も娯楽行事も一緒に区別して考えられている。逆にいえば多目的に使われる公会堂や体育館などでは芸術の創造と観賞のためにふさわしくないということが常識化しているのである。

ひるがえって、わが国の市民会館などの公立施設は、なんでも一つでまかなうことを良しとする傾向があることは誠に残念なことだと思ふ。

さらにこの劇場には職員が三百人もいると聞き、最初は三十人の誤りではないかと疑った。しかしこの劇場に専属している合唱団、オーケストラ、舞台制作に当たる大工や衣装制作者を含めれば充分うなずける員数である。ここにも彼等の決定的な差異を思い知らされた。つまり殆んどの行事を自前でやれる内容が劇場

自体に備わっているのである。

この劇場が公立施設であることを思えば、劇場自体の内容のまなびに、この内容を支えるウルム市民をたまたたい。この香り高き市民格ともいえるものは、おそらく芸術文化に憧れるウルムの人々が長年にわたって培ったものであろう。私は一地方都市の文化施設をあずかるものとしてウルムの劇場に最も大切なことはいくつかを学んだ。そしてヨーロッパ旅行の限られた日程の一日をこの町の訪問にさいたことをつくづくよかつたと思つた。

(八代市厚生会館事務局長)

## すいかの話から

岡村佐規子

ある会合での話であるが、夏休みに集ったある学校のクラスでのこと、先生と生徒が、休けい時間に大きなすいかを切って食べようとしたのだそう。ちょうど全員に二切れずつわたるようにつまみ切られたので先生が「さあどうぞ。」といわれると、みんな大喜びで食べているのだが先生の分のすいかがなかったのである。先生が「おいしいですか。」というところ、「はい、とてもおいしいです。」とこ

にこして答えながらみんな食べてしまった。これが成人式もすんだ大学生の話なのである。

先生の分がないと気づいたものは誰一人いず、ましてこの一切を先生に出すものはなかった。

私もそうだな、ほしければ自分でとればいいのだし、食べたくないから食べないのかと全員思っているのだ。私たちが教えられた謙譲の美德などというものは消え失せてしまったのだ。

もう一つすいかの話だが、夏休みのサマースクールに行った小学二年生の女の子は、おやつにすいかを切って配られるとき、自分に一番真中の所を一番先にどうぞともらえなかったというのでペンをかきとどうすいかを食べなかつた。自分の家ですいかを切ると、いつもきまつて「さあ〇〇ちゃんから」と、もらっていただけである。

人間は生まれたままの姿ではやはり動物である。ほしければ他人のもっているものもひたたくて食べるであろうし、あの人はほしいのだからと気づかずに持っていてやることもしない。

人間社会に住んでいる我々に必要なのは、この思いやりの気持ちを持つことではないだろうか？

何か殺伐とした現代などといわれるがそういう若者を教育したのは一体誰だろう。

家庭生活でも学校でも教えはぐくんでやらなければならぬ問題ではなからうか。

最近でもない早や三ヶ月にならうか、熊本市営バスに老人と身障者用の座席が黄色いカバーをかけて作られた。バスに乗ってよくみかけるのは、この黄色い座席にゆうゆうと腰かけているのは若いピチピチとした女性がほとんどである。

あとから乗ってきた老人はよろししながら後の方で立っていることが多い。若ものよ、広く世間をみまわしてみてください。あなた方が一番若くて美しく活気にあふれているのです。

私たちは期待しています。あなた方が大きな広い心で作るこれからの社会を。

(主婦)

## 未踏のコース

汐見純一郎

われ山に向かいて目をあぐ

わか扶助はいずこより来たるや

八詩篇 百二十一の一V

どういうわけだか知らないけれど、山に對している時、私にはきまつて詩編のこの語句が一つの嘆きとなって心に浮かび、ときには思はず口をついて出ている場合が多い。

登山といっても私のやるのはロック・クライミングなどを云々するほど高度のものではなく、山々の庭を歩き回ることにすなわち単なる山歩きにすぎない。しかしこのなぞの歩き回りが、何故だかいつも強く私を誘ってやまないのである。そこでチャンスのある次第、私は山にゆく、相棒は息子である。軽装備とは言っても、それは何やかやの必需品をつめこめば結構大きなリュック一つにはなる。カメラとか弁当といった余りかさばらず重くないのを私が小さい方のリュックにつめて持つことになる。足の弱りもだが寄る年波と言おうか、いわゆる合力なくしては私の登山はかなわぬのである。従って息子がいくら休みがとれるかによってすべてはきまつてくる。最低、夏の休みに一つか二つは登らないと、その年は何か忘れものでもしたよう落ちつかない。ところが大学は四年の息子が何の所存あつてか年限を六年にすることを、三年生の終わるころだつたと思うが一方的に宣言して、おまけに勉強とかバイトにかこつけて、なかなか色よい返事をしない。

四、五年ほど前、一浪の息子がやっと大学に納まつてくれたのを記念して、十

年ぶりくらいで登山を復活することにしたのがきっかけであつた。手ごろの山として九重連峰を選んだわけである。それらのピークを一つ一つ登頂して帳面を一つ一つ消してゆくのが楽しみである。

いまでは牧ノ戸から手軽に登れるのでつい久住に足を向けてしまふ。しかし記念登山は久住高原側の正面——すなわち種畜場——展望台を経た本道で、いわゆる正攻法ではあるが、コースとしては一番の難路である。いまではこのコースは骨なので次第にすたれつつあるようだ。再開第一号がこのコースだったのは皮肉である。一日目からして道に迷い体力を消耗して、やむなく山麓の沢水山荘に厄介になつた。二日目にとつと主峰にたどりついたわけだが、それも途中ガスに巻かれて一時間半も同じ場所に釘づけされるオマケつきであつた。私にはどうも山から拒否されているように思えてならない。それでもまた登りたいと思うから不思議である。

去年は大病をして一年間無沙汰してしまつたが、九重連峰の主なピークはだいたい一度か二度は登頂したことになる。久住の魅力の一つは法華院温泉を擁しているところにある。ここは自分の足で歩くか、馬の背以外では到達しえないところがよい。カミカゼ登山者とマイカーも遊覧バスも近よれないのが一徳というものだろう。一日の登山をおえた者たちがゆっくりと手足をのばすにはまさ

に恰好な文字通り山のでゆといえよう。標高千三百メートル。

ところで知りつくしたようでも一つだけ未踏のコースがある。それは法華院——黒嶽——白水嶺の順路である。ここは三度試みて三度失敗している。原因は九重各コースの中の本格派の難コースであること、そこへ向かうと不思議に雨かガスにたたられるのだ。ここでも私は私に對する山の拒絶を感ぜずにはおれないのだ。

久住は七月中に登らねばならぬ。これは鉄則らしい。八月に入ると天候が不安定で雨やガスが多いからである。黒嶽まではどうにか登つたが、帰りは白水へのつもりが霧と雨にたたられて一種のワンデルングをして『風穴』の少し上にてた。出発点と半キロとちがわぬ地点で、気落ちした帰路の大戸越えがいかにつらく寒かつたことか。ドシャ降りの中を這々の体でやっと法華院までたどりついた。ここはまさに九重山系登山者のメッカである。最近はいおマナーを云々される若者がふえたけれども、しかし都市公害にかこまれて生活しているわれわれの日常からみれば天国といえよう。

一度、真冬の雪に埋もれた法華院を訪ねたいと思つているのだが、いつか久住の冬山登山で遭難した二人が偶然にも二人とも私の知人であることもいまでは一つのひるみとなつてい

(詩と真実同人)